

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録 (2013.12) 平成24年度:11～12.

大腿骨骨折地域医療連携クリティカルパス導入後の評価と課題

井戸川みどり 久保千夏

大腿骨骨折地域医療連携クリティカルパス導入後の評価と課題

旭川医科大学病院 8階西ナーステーション

○井戸川みどり 久保千夏

【はじめに】

A病院では、患者の安心感と質の高い医療の提供を目的に地域医療連携クリティカルパス(以下連携パス)を導入した。平成23年1月より回復期病院と加算算定を開始し1年が経過し、連携パスの現状を把握し、導入後の影響と課題について検討した。

【研究目的】

連携パス導入後の現状と問題点について明らかにする。

【調査方法】

1. 調査対象:平成23年1月～平成24年3月に大腿骨頸部骨折にて連携パス適応となった患者33名のうち、パス終了となった患者30名。
2. データ収集方法:連携パスデータから1)属性、2)急性期・回復期病院の在院日数と連携パス終了時の退院先、3)入院前・転院・退院時の障害老人日常生活自立度と認知高齢者日常生活自立度、バーセルインデックスの変化4)バリエーション発生状況について情報収集した。また、急性期・回復期病院合同協議会での情報交換の内容から連携パス導入後の影響や問題点などの意見を収集した。
3. 分析方法:①1)～4)の結果は単純集計し比較検討した。②連携パス導入後の影響、問題点などの意見は、共通性・類似性のある内容を抽出した。①②の結果から連携パスの現状と課題について検討した。
4. 倫理的配慮:連携パスデータは、個人が特定されないようデータ化し、研究終了後はシュレッターにて破棄した。

【結果】

1. 対象の概要:内訳は、男性6名、女性24名。年齢は、80代が14名と最も多く、70代が8名、90代が5名、50代が2名、60代が1名の順であった。
2. 入院期間と退院先:急性期病院在院日数最長は24日、最短は11日。平均在院日数は、15.4日であった。回復期病院在院日数最長は134日、最短は6日。平均在院日数は、55.4日であった。退院先は24名が自宅、6名が施設であり、全員が入院前の生活と同じ場所に戻っていた。
3. 日常生活自立度とADLの変化:入院前と比較し、連携パス終了時の障害老人日常生活自立度が上昇した患者は2名、変化なしが13名、低下した患者は15名であった。認知高齢者日常生活自立度は2名が上昇し、変化なしが

17名、低下が11名であった。転院時からは7名に低下がみられた。バーセルインデックスは、9名が上昇、変化なしが2名、低下が19名であった。入院前の平均は74点、転院時は45.1点、退院時は69.3点であった。

4. バリエーションについて:バリエーション発生は急性期病院で16例(53.3%)、回復期病院で4例(13.3%)であった。負のバリエーションが82.4%であり、内容は、患者要因によるリハビリ開始遅れや未実施が62.2%であった。正のバリエーションは、ドレーン留置なし、杖歩行の早期開始などであった。

5. 情報交換の内容:情報交換の内容は、転院について患者・家族の納得が得られていない、他疾患を併発している患者は早めの情報提供が必要、抗凝固薬剤情報提供方法の見直しなどの要望や改善点であった。

【考察】

急性期病院転院時の目標は、車椅子移動ができる、回復期病院は、入院前の移動動作獲得を目標に設定している。今回の結果から、転院時の障害老人日常生活自立度B以上が8割以上を占めていたこと、退院時のバーセルインデックスの平均点が自宅自立の目安である60点以上であったことや全員が入院前と同じ生活の場所に戻れたことは、急性期・回復期病院とも設定した目標を達成していると考えられる。一方、課題は設定した在院日数の延長やバリエーション発生の多さである。急性期病院では、半数以上の患者にバリエーションが発生しており、項目が限局している。個々の患者要因によるバリエーション発生原因を分析し、治療や処置の設定時期などを修正する必要がある。

地域連携パスの強みは、急性期・回復期病院が互いの役割を認識し、早期在宅復帰に向けた切れ目のない医療とケアの提供である。他職種によるチームでの関わりや合同協議会での意見交換は、情報共有や問題点の検討とそれぞれの役割を振り返る機会につながると考える。

【結論】

1. 急性期・回復期とも設定した目標を達成していた。
2. バリエーション分析から連携パスの改善点を明確にし、在院日数の短縮やパスの質向上をはかる必要がある。

【参考文献】

- 1)岡田晋吾:地域連携パスの作成術・活用術 診療ネットワーク作りをめざして、医学書院、p22～33、2007